本に世はお愛様がお問りたらう (本にはお愛様がお問りたらう (本にはお愛様がよいが、関注 (を様が) しいた ( 本の) 大大 ( 本の) ( 本の) 大大 ( 本の) ( 本の) 大大 ( 本の) ( 本の)

て、お客様をあっといはせようた
い、何な終らし、物を探したいも
のだと、主人公が番頭の金兵向と
この金兵南さんなか~〈高級通
この金兵南さんなか~〈高級通
この金兵南でんなな。〉〈高級通
この金兵市でんなり~〈高級通

語落

仙

徘

競べ

第

五

話

冬

枢

圳加

主立口

#### E · SIDE · STORY

大工のことを書いたもの である 大工のことを書いたもの である 大工さんのことを書いたもの である 

焚

火。

小

宮

太

郞

をうました。一つは中広とに動を 下げるころが観りなかった。一つは中広とに動を 下げるころが観りなためではなか つだらうか。運動できあるをした。 ではて、機関点のとはなか つだらうか。運動できあるをした。 ではであて、機関点のとはがが一 さい手動きをしてるだ。被突出は を動が開催って持って行くが、担 動能に一度を自分では出かけない。 であっていったころにこの別の 能数が繋があるためではなから か。そのかはながに使り深の 変響のの個かりな歌りの単数がある。

深識物の手無いや高物の手無いが 物の手づたひなどによく來てくれ がである。

| 世で歌声にあれをしたり、本意|
| 世で歌声にあれるしたり、本意|
| することで、歌からも重要されてあれた。
| であたが、選髪家でもつたために
| びにやつくも直ぐ寒でくれるとい
| かことがな、彼しなかったかと思ふ。呼
| だければ来なかった。寒でも仕事に
| だければ来なかった。寒でも仕事に
| で節を歌とないないつも | 下に仕事す もこの人の顔白味のあるとこ

11

たひに、――前の下は原川になつてあた。――かなり選くから引いてあり、質のあるところに小径がつくられ、その小径の選挙で書のかげに小さい機能といふそら引い 込んで、崖からしぼ のよいほうに向つて のまいほうに向つて に残つてゐる。女房といふ人はこに來て攝き口説いてゐたことが頭 たやうな人であつた。宗右衛門がたものなりなりなりなりなりなりなりなりない。これも動者がお女郎か何かのあがり

らるの様い気が高づるため、そこ 一部に深の間があったが、そこ から深らの域下町が、雪のなかに をさめられ、東南に向いてるるの で夏の歌しまは一人だつた。 宗石 間門がからいよ地角に着目してか ウにも宗右衛門の臓や慣性があつ い仕事もしてゐたのだ。だから子 いたとをしてやらないとこ

も宗右衛門や女房が住んであるや 木口もまだ確かりしてゐて、いま 木口もまだ確かりしてゐて、いま か植木屋 ふものは縮をか ・さらいふ大工や検 ならいふ大工や検 はいる。 、僕には一本の供の時分から家 るがしか

\* 宗右衛門の-

たらを「接を作つてくれなかっ」
たっ様のでするとして上といえ、 ・様んであると、できるとしてといる。 ・様んが、様々らの間でくれて ・カンた。「よから考くるとき」、 ・場でいた事をするとの概がな ・場でいた事をするとの概がな ・場でいた事をするとのであり、そうかと 関ルを3元からであり、そうかと 関ルを3元が、1年とする。

Æ? ことが分つた。宗右省門は手稿を此、鉤瓶の鑑にからみついてゐる下からはいり込んだ山かがしが一下からはいり

んな話を聞いて

で編み上げ、なかのほうに繋かいて編み上げ、なかのほうに繋がぶかと敷いてあって、少し歩くとひとりでに足のさきが進かする靴であった。 傑は果 きが進かする靴であった。

Lなつて歸つて來な となって歸つて來な

それは時々入れかへねばならっ つた。このごろでは誰も孕く ないであらう。 い薬がぬれると着たくなるから、ゆくのが斃しみだつた。中の梨か

室

乡

平

日も

らならしく思へて親しめい、僕にも二度目の痩せい、僕にも二度目の痩せい。

新門はあんまり繋いから壁が形し 新門はあんまり繋いから壁が形し からうといり、手種から山かがし た川のなかに関してやつてねた。 大がらな形で、かかにも恋犬上ら に繋がなかで、いかにも恋犬上ら たがきな干すり、家にくると新聞を かき通り響さないと体手にかから なかって、時とうると話が小影を 変を出して遊びことものつた。 一度旧の女房を置めたすると話がん で、使の気を出りたすると話がないとか で、使の気を出りたするとがないとか で、使の気を出りたするとがないなか で、使の気を出りたするとがない。 で、使の気を出りたするとがなくなつたが、使にも二度目の埋せ 

けれど丹窓なもづかひがその歌や してゐたが、 立部な凝はなかつた してゐたが、 立部な凝はなかつた

いのを一鉢はかならず家に持つ 花にゆきわたつてゐて、出來の

ぐ阿ひ隣にゐない

L. John Komiya をいまった。」とっるでは、このでは、このでもと食べさしてくれたりしておたことを概にてある。そんなものは家では際にわるいからといふので、一切食べさしてはくれなかつた。 り、様気にも肉できの日、似やかり、様気にも肉できの日、似やか。 はいい、ボルの解析を有ると、 だいよれの解析を有ると、 だいまなの解析を介めますと、 だいは合せ あるらしかつは、 様にこの声が、よく手続いるから、すいない。 でうとよいば合せ あるらしかつは、 使にこの声が、よく手続いるから、 こことでしょうと、 ここ がふると概をさして激つてくれ、 がふると概をさして激つてくれ、 があると概をさして激つてくれ、 があると概をさして激つてくれ、 があると概をさして激つてくれた。 ることが名人で、それを作つて八 高屋に剪つてみた。北図のことで朝ごとに一尺もつもる雪の中はこ の歌歌でないと、うまく歩けなか つた。そと醒を唐のやうに糀の彩

ことが名人で、それを作ってく 冬は雪のなかを歩く薬蔵をつく

別右衛門の死んが影音だったか のころは二十章くになってあた楔 は、郷多に訪ねるといふこともな くなってゐた。たて、この二人が

るうちにいよく 新年級百の常日 となりました。 類名様が迎々と臨 時はて来ます。 塚次をカン くと 野ける、 蔵世のやっに明るい。 金 野ける、 蔵世のやっに明るい。 金 そうにして置か なければいけない」 奉天臣の主人も大きに競んであ 奉天臣の主人も大きに競んであ

何か新年むきの珍しい噺をといる舞浴文で、脳々等へましたが、とうも日本には珍しいものがない。そこで外國の前を申上げようい。そこで外國の前を申上げようといふ考へで、脳が國のお噺をお

楽これは巌洲皆で申上げたいが、

なります。ところが毎年のことでもます。ところが毎年の近くしたので、 でなります。ところが毎年のことで、お客様を担ぐます。ところが毎年のことで、全球も穏をやり歌くしたので、

れるといふところに個目止められて御戦を願ひます。一身分艦の太 夫郷採輸人お目通り上密まで控へ させまアす」 下手へのさまつき、 を「耐害らは」といるまして中上げあり、 者が長を除口とも見て中上げあり、 をす。際年の百階に窓びまして、 を実として砂壁に大ルますを観音 は、この度性展鏡に一般が乗の側 を総数に供べます。大大の計を向 しまするところの取から同様の規 しまするところの取から同様の規

吉  $\equiv$ 

B

家

ボロの着物を着て、延びた爪でボギロの着物を着て、延びた爪でよといい、ボロを動につれて出て参りました太天鳴物につれて出て参りました太天

リボリ縮を振さがら、ノソくと 出て來た。見物は弊症の節形けに 引養へて、太天があまり汚いので かつけに取られてをります。 〇「オイ、お削るの男を知つてる

のでは、 を提覧しない正確の様子に腰を排 を開墾をつけ」 二世馬占山だよ」 ○「ありやアお前何おやアないか

対象の全合圏に、金兵像がカチツと助け木を打つで鳴物をとめ、金一身分離の依を関すれば、これより分離の像をあっますれば、これより分離の像を 

のほうでも金剛にしたい、せひあれを自分のほうでも金剛にしたいいからといますが、如何でございませう、フーアと一ッやつで強く 端に 参りますまいか」

原へ、ツさうだな……どうせ来 だだからでつせらうか」 東でおいふことなれば、誠に有 東ではいふことなれば、誠に有 東でくれ、ころらくもと 棚ま なくなれ、ころらくと 棚ま なくなれ、ころらくと 棚ま なくなれ、ころらくと 棚ま なってれ、ころらくと 棚ま なってれ、ころらと 様のなな

の新り動い来とは。

全ったれでも電人が非難なところ 空に振るといふので、耐点気をやりましたら、どうも関フとつつで 質に減ると申しますから、機の質 をやりましたところ、残んの収減 をできましたところ、残んの収減 によりかもりながら、ポッリ 〈 いでも担くは由す、しまのには頃ましましまから、どんまな、然も山次の町谷にてもなることか、とても認識には自己にかることは対しまったが、よい簡単に一部を知かったははりでせく、大原な総人を促し出して命りました。 道では、しなしい大だし、道では、りなどしたが、といい大だし、道では、しなしい大だし、道では、りでせく、大原な総人を促し出して命りました。 な人と同じゃう な身類が出まして、どうのが素質がかからないく らのでございます。 「最そればない難だ。よくその似 人が然でくれたな、 ってればなり難じくくのは断だ。 ないを一としてのないが高い やりに加みまして、人物がになる してだからといった、やうやく割 全了」身分盤の縦と申しまして、 全了」身分盤の縦と申しまして、 なする。 拉西北西 74 

金「イエ物道へ投り込んで置きすて置いたか」

せんび、 ・ ので、 ・ とった、 ・ とった、 ・ とった、 ・ とった、 ・ とった、 ・ とった。 ・ とった、 ・ とった、

ガヤ (一臓やして次つで来たから金」大夫の獣中少を担しましたる によつて、今一はやしは御が数を 駆びます」 と鏡帳をして、チャーン、チャーン、チャカ (チャン/チャ はやして

能くしてしまひ、「ぱらく休息を をして世が数を開けました。鑑然版 して神が数を開けました。鑑然版 人情子にか、つて、ファラと吹く と、口元らら幅のやうなものが出 たかと思ふうもに、その中から或 のやうを簡が飛出しました。見る を歩き出した。見物は疑くまをからに材を突いて、ノコくへ続形をなすと、総拱艇人と 樂屋の燈火を

した。見物は驚くまいこ

全八フ、どういふお紹ですた」

「門は山地、私のほうの町内で
「門は山地、私のほうの町内で
「町に山地、私のほうの町内で
「町に山地、私のほうの町内で
「町に山地、本のはかりの町内で
の歌りや何か用かにして迎いたん
でございますが、4世間はから、2世間にかり発生に戦つて勝くない。こつもの金別が加くたといい。こさい、それかのでするもく。1世間はかり発生に戦つといい。ことで、それからのまが、1世間はかり発生に戦つはい。1つもの金別が加くたといい。ことで、それかのマナが、単位でございますが、地間でございますが、側面でございますが、地間でございますが、地間でございますが、1世間はかり発生に戦つい場合ですが、または他のと

全サノ、賈はあの個人は私のと ころの寄非処實へたった一べん配 ころの寄非処實へたった一べん配 を出して見せるだけというが収表 を出して見せるだけというが収表 かどうか分らないが、とに傾地模 のお解みだから、関いて見て上げま せう……。エー先生、お祝遠様で、

## 大阪仁〇 加

4

# 敵討頓狂音頭 直

倉の旅宿の、それも陽に遂けた整州の浪人京極内匠は、筑前國

好いから、どうかして、金を持ちかうなりや、インチキの手段でもかうなりや、インチキの手段でも

と書いた看板が、怨めしかつ

(板)には、引上げられない、ナヒだが、不幸にして、當時の馬騰 いつの世にも、失業者程、淋しいものぢやが」

が、こんな眼まで、追ひかけて来 も、附いて避ると覺悟はしてゐた であると見いて必なると のも、無事ではなかつた。 とうとは知らなんだし ないに、この三つを、恐れてゐたたいに、この三つを、恐れてゐた は、「ソレ、ヨイくく」ばか出來る金銭もなく、たゞあるもの ュー豪華版に夢中になつてゐた。 りに詰めかけて、その當時のレザ

と、非邮票行した、天正十三年の の、安建廣吉田郡の郡山八 糟 宮 の、安建廣吉田郡の郡山八 糟 宮

ので、空話・試の砂像で、見物は、 見明から、月自即しに、立窓の余 地もなく、総合せた丸太の上の、 アルブス・スタンドにまで、謂ら 数れてみる。我が、京様内匠も、 は、放生管の祭祀 と繊維の日も

一味総は、催かに、多族二人和紙 人を総へて、この無議等に泊り 込んだといふ情報を得た、京様内 原は、離り上つて整んだ。

開いてある雨月を軽ひ、屋子に迎明して忍び寄つた。 取りで忍び寄つた。

て、内部を娘ふと、白星頭の老爺った内匠は、先づ睡液で穴を開け

ながら、質にダラシな。 大きな口を開けて、一 たいカー

が、陸子の紙を傑はせる頃、素稿 を持つて京榛内匠は、怪し気な足

それからは、買ひ立ての履子 忘れた事も、深へ願つてからやく気が着く程、彼の心は全く

流乱能を敷きつめて、小腰上層 かがら勿燃ない様で、それに りながら勿燃ない様で、それに りながら勿燃ない様で、それに

脚も、何もあつたものではない人で、もう彼の前には、幸君も

て、絢爛たる天國の間であつたは間でも、正にそれは、彼にと

等子屋みたいな 名 を つ けやがつ で何、そんな男には、歌じてやら でが なんて、七味樹

りぢゃ」「よしッ、どの上は暴力あるばかるを得ない。

の御息女、お閲轢でござります」

聞きも終らず、彼は「お願、聞きも終らず、彼は「お願、 口の中で繰り返したが、魔

「巻木樹樹、さうだ、後頭は男太 「巻木樹樹、さうだ、後頭は男太 の便ひをするに相差はない」 

高には、非常なるるピンチ、京極 歌には、非常なるるピンチ、京極 歌には、非常なるるピンチ、京極

••

際より、鶴の伽ひ濃やかに、物云師に依れば、「引き渡したる。 がの伽ひ濃やかに、物云の間に依れば、「引き渡したる。 がの。 てあた春木wwwの顔が、直ぐに彼 下男を使ひに出すと、暇で困つ

ちゃが、モソナ 、

「さて、この時だタ」 とばかり、十六日の後は更け とばかり、十六日の後は更け して、一味館の概たかと大齢費 して、一味館の概たかと大齢費 が、関子の医生性せる頃、素権

春木の掌に懸へたから事性は

一にないか、第一に金がある事、第二は男性師能力のある事、第二は男性師能力のある事、 第三に意観を始め、凡ゆる銀鯖の 第三に意観を始め、凡ゆる銀鯖の

数へ飛び出-は、現金なもので、も 銀道即配役吉岡一

情りない、とても思い歌語であつ 体りない、とても思い歌語であつ た。それから一蛙の後、見事に、 ノック・アウトされた春木般獣の が燃とした変が良つて来た。

火、拨打ちにその利齢を斬溶し込んで來た 京 極内匠は、電光石込んで來た 京 極内匠は、電光石の杯を切り折つたが、直ぐに飛び 概事との一刀を抜くより早く、絵紙事との一刀を抜くより早く、絵 確かに手答へを覺にた。 「何奴ぢゃく、」

と襲れ、一世の鰥客吉岡一味際

が、その日から始められたのだつなかった。そして 彼の 失瀬時代なった。そして 彼の 失瀬時代なった。そして 彼の 失瀬時代ない



**が成れています。 というけてみます。そこでその一九三三年の修験を能るアラネードはマアメリカの安慰を大いにうけてみます。そこでその一九三三年の修験を能るアラネードはマアメリカの安慰を大いにうけてみます。そこでその一九三三年の修験を能るアラネードはマアメリカの安慰を大いになった。** 

# 九三三年の洋装を語る つとした繋が並さはしいといつ

### この姿こそ

10

古行あぐり

立のもので、イーヴェングは縦白 の小標な花機緩のレース。帯はビ ロードの潮みどり。耳縫り、部線 りは水晶です。

あ・ら・も・う・ど

6

一九ⅢⅢ年の洋鉄界は、今まで 一九ⅢⅢ年の洋鉄界は、今まで までも流行を遣ふといふより、そしてドレスの流行にしてもど

す。またジャージとか毛織物ですった。なだがな織のドレスを召した場合を用ひた歌手な髪でいっと思ひまを用ひた歌手な髪でいっと思ひま か、さもなければ自然のものにが耐も思ひ切つて被巧能なものひます。 もいゝといつた気持を際し 分の間性について研究され

総じて一九三三年の洋製は骨性 がな悪明な美を感じられるものと がな悪明な美を感じられるものと

三年の実しさをあらはするのだと 既ひます。健かくいくばこのお願 既ひます。健かくいくばこのお願 歌かいコートが現じ生かされてみ ますし、(離りのないスマートなド レスがスペトによって生かされて

このイーヴェング委の裏画のお 類さまは長瀬東子さまで、長くア メリカに部奏され感立勝制なさつ た方です。この散は勿論あちら仕 た方です。

(付ない一九三三年のミス・ユホースを悪び、着こなしていらつしこの配源な美はたしかに外人にこの配源な美はたしかに外人による。

## その健康美

メイ・牛

一九三三年盛の東は、御断をの一九三三年盛の東東、城れない美でなければならないと思かます。シネマではガルボにしてもテイトリフににしても少変都でするといふので、 新郷ボリアム・ホアヤンスが一九

この器・奥さまは、原の線のがつこの器真は怯害指核夫人ですが た近代的な美しい肉體の

とを感じます。セナからたとへば この方がこれが今の部行だいよ ドレス以外のものを着ていらして も、それが大の部でトしらも思は せるほと態感した影響された場外 の着手です。この部行をサンブル のまくとり入れず、微像に比較し さまなかまたて、美しくみせでみます。たいていの人がごてくとして能りのあるものを看たがる中に、この規模はいっちプレインのものを無源作にきごなして、それでるで蹴の先から足の先までの鑑いるつなが、いつカモジ、いつカージ・というローやる歌、いつ 一歩先を歩いてあ

かにより、無語作とかった曲気 のない美しい謎で、私が無はフラ のたい美しい謎で、私が無はフラ のというないでは、またりには、メー メート・スランチのは、は、メー メーカのに様を扱ってはつきる。」では、メー メーカのに様を扱ってはつきる。」では、メー メーカのに様を扱ってはつきる。 に関ったは、メー との使きるの表とし、大三三年 との使きるの表とし、大三三年 との使きるの表とし、大三三年

伊藤英子夫人(昭和八年の和服婆」参照)



日毎ーテンサ

日五十月一年八和昭

24

住

古

折

枝 夫 人

(「その健康美」会問)

ンの消製です。

蚊 ゃ

IJ

#### 連 長 篇 說

#### 事だん 郎。 第 五

回

號一卅第年二十第

ンデー 昭和八年七月二日

每日

行發曜日毎

# 『江戸役者』・『八代目團十郎』終篇

雪岩温二

#### 邦 枝 雪 完

大学 は 栗田 地 大学 は 栗田 地 大学 は 栗田 地 大学 は 栗田 地 大学 大学 大学 (14年 次の 14年 次の 14年 次 14年 次

◇……八代目前川崎十郎は、そのころ上方にを へた田川衛老師の息子で三十二章ペドドウタ原を 一大で買びつて立つはどの人類も名を著であっ た。度には、宝野用でよとした情報からかたが、 たとしたことから仲重のなし、心の底では変しさ に関なながらも、表現とが適とにさくぎられて、

にある時でも、 な様へが近りねなようちやナならね。 実は押しを押されるした。 歌へ埋むて来なやつたのは、 おめくをかうして、 節へ埋むて来なやつたのも、実は押しを押されるしたが、 ほんでもようく 気をつけなけりやいけねな。」

市を製が一座と共に二十七次も四男の組織と、線 の影時に営る態深おためとを連れて、この失婚症 の影時に営る態深おためとを連れて、この失婚症 の問時に営入つて来たのは、今から丁度二十日は の問時に対で、水をと聞もなく技術のさいかか かり而であったが、水をと聞もなく技術のさいかか が成と終して、四百日は形で脈へ線をいるの間の が成と終して、四百日は形で脈へ線といるとし、 が成と終して、四百日は形で脈へ線といるとし、 がはいた。 各部屋からは木尖元の中行律を右側であ がけ着けた。 小屋王の三河山豊長前は、わさく人間

おさく江戸へ遊ださたりしたのであったが、それもこれも国王日の郷を結してからは、次郎に不安が前ではつて、また歴史へは立てれるでも、けるではどうすら郷大田に、池の野田に野るでは、出来るも子を記るがは、出来るも子を記るが、いつの同に総に寄ってゆく夕節を見切ってみたが、いつの同にやら野蛮の中でであるのに気付くと、慌て、次の間をはずって わざく、江戸へ發たせたりしたので

要峰エヴエレスト大景観 【特献】 一九―

しき天 入江プロ映畵

**相りにする、変兄の賦士郎へゆくより仕方がなかつ相りにする、変兄の賦士郎へのよい能動は、父が無二のいはる後に、つい還り所のない膨動は、父が無二のけての、禊客の鑑予をいることになるために、不平けての、禊客の鑑予をいることになるために、不平けての、禊客の鑑予をいることになるために、不平けての、禊客の鑑予をいることになるために、不平** 銀げてゐた。が、その二言目は、必ず難合へ結び付銀げてゐた。が、その二言目は、必ず難合へ結び付

薗 荳

트트트등등

本誌今夏の誌上計畫發表 来のシング風景 山本 千春 楽術界景 に書

週 間 時 耶 國 間 時 耶 話

は無信はかりが養行もやればんだからの。よだん縦は無信はかりが養行もやればらなぜ一度で説事をしれなんだ。」「可い、関ロなかりたんで。……」「でい、関ロなかりたんで。」「はいびやすればんだからの。よだん縦

#### 今 東 光

日二月七年八和昭

# 立板に水の易談義

# 愛妻をヤッづけに、變つた春聽師

光田は、重要人なり、電力によったう。
こらに駆発は重要となってみる。
「競技・企業の大力で、一般では、一般では、一般では、一般では、一般では、一般では、一般では、いかます。「競技・企業をのです」」
「たんなを製くますれ」、「成功・企業のです」」
「たんなを製くますれ」、「成功・企業のです」」
「たんなを製くなったがかっく無しいか、情報は、他かったがかっく無しいが、「のが難はなっていたかっく。」
これから、「のが難はない」という、「対域とののたなかっく無しい。「のが難はない」という、「対域となっては、」のこととう。 「今春郷」 と助離した、字標の貢献な宋版。 と助離した、字標の貢献な宋版。 はくに起張してくれた文章の個 別が、夫人の郷門、突球線、大を 選に「概せたトマト」をつくつで から、ガセン心境に態悩を楽し、 の話の変質的にいはすれば、大きな のみを登拝の借りに求めた今氏で 「房を?」 「房を?」 「房を?」 (離者よ「弱」といっても、

である。つまられエ。病気もや

に乗せ、それに南腕を託して崩かない。どてらを着て、枕を飾の上

で、かなり興味経を潜つで、かなり興味経を潜つ で、かなり興味経を潜力に。 か、今氏の総初の部髪は、 が、今氏の総初の部髪は、

度の何處にも堺主らしい臭味がです。しかしそこは臨資、どつにす。しかしそこは臨資、どつ

病氣中の收穫は易を観覚したことが顕著中の收穫は易を観覚したことが見ばないである。が、

かも知りたいと思ったもしく、ま た左渡りタールハーマーマーデボーリンと大いに開発してるから、 のブリ・テイヴな、自然が競技的 のブリ・テイヴな、自然が競技的 のでした。こことに難して、取行に おいて開発する姿勢があると思 が、こことを意味することと 「髪にかいてはヨーロッパでも吹 は得てゐたようだが、ゲーテなど は得てゐたようだが、ゲーテなど

八卦の占ひではないですぞ) およそ難しい「易」です。許者 はこの難しい話はいたつて嫌ひな 方で、それよりも、同氏がかつて

(語) XYと8名率力と前頭新三脚 が関で、モダンマメの前が結び が関で、モダンマメの前が結び がなからるもの、よの響音を埋ぐ、 かたからるもの、よの響音を埋ぐ、 かたからなり、

今

春

聽

氏

は、といかたくなつたが認はまた 頭く、響・手夫人の悪心でくれたお 頭く、響・手夫人の悪心でくれたお 原、者・手夫人の悪心でくれたお 原、者・手大の世に別れてある。 関か情 宗五十六世に別れてある。 と たるが置にマルキシストであると たるが置にマルキシストであると

「いゝエ、肌苦してゐます」が心配してゐます」の場で?」

完果食

の川つのイデーを一つの登場に優していたとそれから長極小説を百八十書けるこれが、まて解集中の所蔵です。これが、まて解集中の所蔵です。 れとは一致するものだと思つてゐる亦酸法と、マルキシストのそもいへる。天台學と、張學の持つて す。しかし君い人などは大概寺殿上の方の人などには緻黙に無いで上の方の人などには緻黙に無いで、「戒徳はやかましいですからね、 「天台は装帶を削してはゐないで

「お寺の住職になったやうに聞いそこで質問の矢を放つ。

\*

「奥さんは何か商資を始めます

「繋ぎんは皺髪と聞いてました「繋ぎんは皺髪と聞いてました」が、膨髪でありませんね」が、膨影でありませんね」とがあるのです。その時態を、モー・、なんでもなく切つたも

**\quad** 

イッといふ日くはないと思ひませ が、讃者諸書!! 無疑の愛妻家 が、讃者諸君!!

印織を観飛ば

研の圧可乙吉はさずが取け目がない。トレコ総の質付はとりも聞きてトルコ総の質付はとりも聞きてトルコをつけた更待。と、に目をつけた更待ののがある。

の日本紡績圏の関特官島清次郎・インドを向うに廻して喧嚷最中

物店を開かうなんで記は進めてゐ 茶店か、婦人伴殿店か、権人小間 不正れかに聞いて來ましたね、喫 。皮肉なもの ないからネ」といふ。 前殿は同君 の口の融さを示し、後年は往郷吹 き加減を示すものだが、テニスだ き加減を示すものだが、テニスだ い、また風が禿げたといぶ年でも 関がもつと 聞く空き 地が 多けれ せんか」と聞 る。その尻から「尤も僕も日本のいせあるけるか」とどなりつけ

たて、策期以上 型夫一同にうたはせて元氣 「別以上の好薦、すつかり 「別以上の好薦、すつかり 「別以上の好薦、すつかり

こ、は北洋ベーリング、都をよって三千選、師うに見ゆるはカ ムチヤツカ、群々たる歌峰、巻、 人・雪で蔵引に織りつく、六月 火でも廿余度、輝くわれらはら からは、愛多の奇智頼にして、

振りし魚は紅と白(後略) ったになつてゐるかどうかは不 明だが、あの面でうたへと命令し たらこれでも激天はうたはればな

アツパ

ハッパよ、

さらば

進

步

12

簡

單

服

お

中

元

(12)

は

16

進步して、今日のように流行をアッパッパがライト・ドレスま

アッパッパ――夏ともなれば都大路は勿総でしてある夏の醌散般である夏の醌散般である。 総行してある夏の醌散般である。 総行しはじめてから三年以 きはめたのは、配所で限さい、の と、夏分はもの重い場部しい傷か らぎれらはるのが主な原放だが、 もう一つ夏のがせないのは、野人 拝服会経験の無逆に乗ったからで、 が成としたいが呼合ふか呼合はぬ かなどといふ症中も、これなら駆

しろでこのアッパッパが

【第一図】今夏の新製品シルクピケ(富士網のピケ機地)将へ巻いた「サス 六・〇〇、スカーフへカーフも軽ろ氣に動きのあるドレス (ドレス 六・〇〇、スカーフ

ドレスの製品のものだが項に今日 れも単一線で、いはゆるサンマー れも単一線で、いはゆるサンマー れも単一線で、いはゆるサンマー



錢から三円五十錢。

銭-二円五十錢。富士総で三円五十コットン・クレープで一円五十

ベンベルグで六円前後といつた

右は輻廣い斜線のベルトで全艦

タイが平凡な中に緊縮を得た、スな特証りと、何気なく結んだネクな特証りと、何気なく結んだネク

放ごころ

してこの言葉も いつ か 耐れられ ス・ドレスでな言葉がこれにかは らうとしてゐる。 さて、このサンマー・ドレスか

動 大空ひろみ

價、ちょみで一円五十錢から

の気分を引き締めたスリープレスの気分を引き締めたスリープレスルーと同じ年地の大きい衿をつけたところが気がきいてゐる。 観、ドレスはどちらも大円、ボ 観、ドレスはどちらも大円、ボ

ったセラー衿の感じを出した存む、 宮真(二)はい づれ も白 の常士 價、ドレス六円、スカーフ一円 阪屋調べ】

BUCと、何でもないの 同じくBTはと、何でもないの いの 活動の案内人A「ぢや、あんた、 ―暗闇の仇打ち――

御贈者さん と仲がいくんだね!2 一繭 養 が ら――

かり、いふんですもん……」の神經にさはらないようなことばの神經にさはらないようなことば

DEFGHIKLMNOPORTUWIXYZ-ARDEFGHIIK LMNOPORTUWI 



# が 家庭の様子をよく顔様如の と思ふのは、何といつても してもります。いたといてう NOOBELAAMKE VEOELEHINKT

◆……また私のお友達で否水の カクテールに興味を持つてゐる人

まづ家庭の事情を

重寳なのは日

用品

# 誠意をもつて選ぶ

お中元の季館になりました。毎年のように、主催の額を握ぎてものの1つです、頭り一端の品のはれてうれしいものです、映像方の映像から誘ってうれしかったもの、重要なもの、配るものなどを向って実績のの考に供したい。似かます。

が天装り、部所に使い連貫を称ったとは、あの距は、無解なく重調いたします。
◆……服るものはお思い時です
から生息で生態で、果物などは、あ

何を贈りませうか

?

鏑木照子

無駄にならぬよう

りたいと思つて求めたいと考へりたいと思つて求めたいと考へ

番座りものだと俗じます。

新長三郎治氏夫人 中 上 川 蝶 子 千代田生命大阪支 中 上 川 蝶 子

かゝはらす鑢しいものです。とくた。 ないものは、そのものゝ良し感しにない。 そのものゝ良し感しに

日毎ーデンサ 日六十月七年八和昭

中上川螺子夫

にとへば秋田なら、第の撥響のついた何か響物だとより、 サッキの方がられしく歌かように → マーモルから歌うて重響なといふのは平見ですが掛からのお御、続め美 野浦 修覧などいつた

ずわけにもいかず、處分にこした。時間が時間なのでほか

るこご旅 日田の窓地があるのです。初夏から配款へかけての 田田の窓地があるのです。初度部階等のごとく遊んで のな既を持つてるます。水は智階等のごとく遊んで のないと思ふはどに灯窓 変軽は、この世のすがたではないと思ふはどに灯窓 のないと思ふはどに灯窓

濱

してゐると思はれる

フェーリットは まって たなどを ながらちられしい歌をもつた。 存 の記が開ばられしい、歌歌地を他 の土地はらの歌が変がかいからに に入った、自動館、フロイラ街、 で載などを知形では、はなはな様 佐女祭らであった。 一世祭かるカフ人・郷は郷野部で カカフと歌野三社は、同様に原数 のかったは野三社は、同様に原数 のかったは野三社は、同様に原数 のかった歌野三社は、同様に原数 のかったは、野田であった。 これは郷野部でりとい、歌しみもあった。 水に迎る庫岸の家

0

水に埋る解的の窓の用るさはうれ して、東ルコでを貼すると、 して人だりと田の中に立つてみる りまで繋うっになる水、吐炉側の 原次側かかるる、能野の動か した人間をしていまるか、吐炉側の 原次側かかるる、能野の動か したのな断と似されるのと

を表示された。 と大き番片がならははてんだ。 とかの中には落と山の短端かたくかには落と山の短端かたとない。 を取りまれてらる。彼れたら置成がある。この表明らしい景のとかかし、 かある。この表明らしい景色のとかかし、 かまながれる部分へのんびりし たきを添ぶねる部分へのんびりし 駅かものが少くなかつた、再紅州駅かものが少くなかった、東紅州駅は美人窓である」 しいはなしを開いてゐた、変 といいはなしを用いてゐた、変 といいはなしを用いてゐた、変 といいはなしを用いてゐた、変

私は大参繁はわづかに通ったば かりで、大鷲中沙路を往つた、愛 百年のむかし、後島羽上里が百官 を召し総へさせられ、しづくと

一本化粧はするごんお上手であるながった。 都商には大した美人がみなかつた があれた。 を がかれたを がかれなかった がのながった。

0

た。 ほかくくとあたくかい 南國の機はそろくくと散りかけて ふにわかるものである。 春 旅

「春」は馬車に乗って来る季節の 駅者。 「総」は、古風にいつて、「他郷三 起り」の義としようか。

る

ない

間に八重機がらんまんと吹きほこい 変をそつとひろげてゐた。その山には繁櫻が織のようなやはらか

などでなつかしく贈ってゐた夕w でらいところに閉るく評を出せ、 を握じこぶれられぬものはなか た。道説等の花には、どことな た。道説等の花には、どことな つてゐた、まことに著はたけな。 である。 概といへば、こんどの銀行で、 概といっぱ、こんどの銀行で、 なのながで、 を もばん印象にのころ、遊成寺で もばん印象にのころ、 **したはしい直路がある・** とく思つてゐた夕暮 のこる、遺成寺の のこる、遺成寺の

土地ではもよっと見られないよう ところに、難人のことろはかかれ てゆく。 手目者の機能とを含まれるいい。 手目者の機能とを含まれるいい。 手のは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのでは

マンスの中にひき入れられるようた。膨野三融の神としざは今さらたり間きなほつていふまでもない。けれども春の配併園にありがたいものは遊成寺であらうと思つた。

اب 13 俳句

×

J

部をしながら、「機」に旬帖を持 たない駅が作家は、縦行敷制を忘 れた順行者に比せ らる べき であ る。

で、総君にも意評お要めしたいの
で、総君にも意評お要めしたいの
で、総君にも意評な要が、
は友

て、これを仰帖に書きとめて置く ことを忘れはしない。(登朝にな つて見て見ると、案外下らない句 だつたりすることもあるが)

は、窓に手帖を一棚房棒してあることである。人間の部に伸ない、駅が付きが定ぶのだが、きらいふ盛らきがまない。ちいには、直ぐさき深身ない。ちゃに、たの手任に書き続して置くといい。前者任機らく、自分はまだまい。

た記憶がいくんだからそんな必要 はないとお考へになるかも知れな いが、これで人間といふものは殺 外部れつぼいものだから、いまか 外部なりである。

で、これを可帖に達言とめて同じて、これを可帖に達言を見なる。による、のがお来れば、たとへ変中でも関方の信気スタンドに豊を語げる。 した人変中でも関方の信気スタンドに豊を語げる。

したを実で、ことこまかに記載されてあるものである。 まして、膨をしておる時には、 まして、影をしておる時には、 スープ・ケースを誘れても、句句 は弱れられない。 がはいはずもがな、監撃、敵文の がはいはずもがな、監撃、敵文の を計論、スケッチ を はじめ とし と、個点の文字・楽郷上の事項に

スリッ・ケースを添れても、旬桁 は添れられない。 おこれを整備においてとらへた映 がこれを整備においてとらへた映 がこれを整備においてとらへた映 がこれを整備にないて、必ら に関うにでする裏向 に押し置されてしまって、いっし かご飾の関をがれてしまって、いっし

に 株で大阪を誇って ― その頃 に、株で大阪を誇って ― その頃 に、株で大阪を誇って ― その頃 の用 紅筋性 牛皮 (世界大阪を とく こうした (本) ― 4 でした つでした (本) で 1 に つってした (な) で 1 に つっている (な) で 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1 に り 1

新和歌歌は青小都である。既行 のあさいこの歌の右手の刺は、西 日を添るしたが出来ない。 新のダイギル歌歌が、すつかり 酸を溶してしまふと、俳の動ちみ (の春湖) 遅かの 電歌が描がりは

その當時のみづみづしさを失つて、「星物の素」描」は、年齢でも、た「星物の素」描」は、年齢でも、た「星物の素」描」は、年齢でも、た「星物の素」描して、われわれが、膨をしている。

は、何と不幸なことであらうか。 としては確かに成功してゐるといとしては確かに成功してゐるといはればならぬ。 だが、 紫 媚が句に ならずに終だい、 紫 媚が句にならずに終

See See

この方法――作業が認備においてとらくた無物を認知のかわかで
てとらくた無物を認知のかわかで
にとなくないでするは、いは
に定様にと独立となる。例に総
がの際近るところではない。
にのが後近のところではない。
にのが後近のところではない。
にのが後近のところではない。
にのが後近のところではない。
を削められるやうととうなではない。
を削められるやうととうなではない。
ににあるては、入しく時間で後
、経験に駆じ座でみる危物
の表が、取上に行い、かう万つた。
にいるではない。
ににあるては、入しく時間で後
、経験に駆じ座でんる危物
のみが、取上に行い、たらが、のならに対しているが、的ない、なりとしているが、的ない、なりとしている。
にいるでは、入しく時間で後
、経験に駆じ座でんる危物
のみが、取したしたとはない――と順
いてるる。

0

2

部の忌論に觸れるとしたら、素描記して見よう。

に表示している時に、 に表示している時に、 に入れしている時にはお出れてある時に、 に入れしている時には明れてもまたの意質に出ている。 をもにはでいく加太の意質であって、 であたいからいるにからないない。 をもにはでいく加太の意質であって、 であたいからいこの時の体験のであり、 もるかはこの時の体験のであり、 にないるまたりから、この時は微いであって、 にないるまたりから、この時は微いであって、 にないるまたりから、この時は微いであって、 にないるまたりから、この時は微いであって、 にないる。 にないる。 はどなくこの時に、概形の姿に にないる。 にないる。 にないる。 をもいる。 にないる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 にないる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 にないる。 をもいる。 とも、 をもいる。 をもいる。 をもいる。 ともいる。 をもいる。 をもいる。 をもいる。 ともいる。 をもいる。 ともいる。 をもいる。 ともいる。 をもいる。 ともいる。 をもいる。 ともいる。 ともいる。 ともいる。 をもいる。 ともいる。 とも

「お前さんより外にやるものはない、もういゝかげん観念してあつさり申してしまへ」 重な取調べを進めて見た。 

ナ ン 乜 ン ス

20



脇 陽 邷

で、この世の部語ですが、。 をつけて「14ヶ町買」。 をつけて「14ヶ町買」。 ないのですが、かか棚屋像くの て、やつは「14ヶ両買」ということに欠ったので」で、マフは「14ヶ両買」ということに欠ったので。 で、マフは「14ヶ両間」というに関係したのですが、かからですが、かかったのでが、 を辿りて、17ヵ両側のあかり は「17ヶ村と」なんがオスター キング・ティースタン・ボー トング・ティースタン・ボー ルなんで買し、職間が人が出版。 アメーカのでは、スキーサン・ボー ルなんで買し、職間が人が出版に ルなんで買し、職間が人が出版に ルなんで買し、地間が人が出版が ルなんで買し、地間がしている。

日五十月一年八和昭

lbbaka)pr JSHOKA)

で、ライターをパチリとやらか が、早合點してはいけません。 が、早合點してはいけません。 で入の認識たるや、こんな生態

ところは、「寸」 おくやりまして。
さて指導、節々、といつても二十年の世、漢章の駅山でよく見かけた報酬機関、作前のやうなレコードを振りやと比さしただで、マナーイをカラく一巻きつけて、日上が「トくでり、十八二十人づく」

郷まつて、スパリくとやらかさ うといふ。日によつて時間を定め て、世界各類、色とりよくの照準 を振供する。側の八時からも時ま でが日本タバコの時間、次が英國、 あれだす、あれだす。あれをすのまり持込んだのが、この版ののより持込んだのが、この版ののような、保留しょうな物の先が、イブになってるて、ニ十人三十人一十人三十人一、風で、ふかく、とアラアに埋まつつて、スパリくとやらかさうといっち日によって時間を定めて、世界を関、色とり人の概率

脳になって、ゴム酸の先を耳のは、からりまったは、単純の一回が一回が一回が一回が一回が一起、大代は見てのお使り、ちゃない、同いてのお練り・しゃて、いらはい。 すつから がにも好し がいるがど 人の氣づかぬ大 9 ん病消湯に

かぬ大妙藥を

に安くでよく効くので回帰者
「安くでよく効くので回帰者
でも数でも物で大きを増加。
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは、一切に
「日本のでは
「日本のでは 上げます

ちらして、ペッく

先う総利は「「「よく復費」から、 本なて「大日本などのでします。」 なにはいいにはいいでします。 でし、日本中を観視さらって概要 かに、日本中を観視さらって概要 かに、日本中を観視さらって概要 がに、日本中を観視さらって概要 がに、上さいよので、5人の各 を担保証を書いて、1000で、5人の名 を担保証を書いて、1000で、5人の名 に関いていけらりの解析をもります。 に関いていたし、2000で、5人の名 に関いていたり、2000で、5人の名 に関いていたり、2000で、5人の名 に関いていたり、2000で、5人の名 に関いていたり、2000で、5人の名 に関いていたり、2000で、3人の名 に関いていたり、2000で、3人の名 に関いていたり、2000で、3人の名 に関いていたり、2000で、3人の名 に関いていたり、3000で、3人の名 に関いていたり、3000で、3人の名 に関いていたり、3000で、3人の名 に関いていたり、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、3000で、300

かおりの證言

「おーい、××子や」 と影響をあげると、 「あなだことよ、在へ一計」 などよいぶことにもります。 しかし、これなどは資本金の五 しかし、これなどは資本金の五 関の士時が日本漢の「水形」八 時が表現の「ネオッ・・カット」 時が表現の「ネオッ・・カット」 「いと・指でマラの「エキセレ いと・指でマラの「エキセレ ンテス、「牛を扱の同様」(アカリー で、お野窓の「発売」(ドイット) からハバナ、オラルダ、ドイット)

「お桐が続」たのだらう」との訳 配金原学、様でも、所々なるが をに続いたのだらう」との自己学 考に続いたのだらう」との自己学 素に続いたのだらう」との自己学 が「な解析なない。そこで、その原 配盤につき駆形で反射を受けた のは最適力の目とに続ける かおりさん(できしょうなたで、か おっちんの理言は、便宜を始の次 かる有力な様称となった。 しました」と口を脚 本部では「犯人は」 な」との想像は十分 な」との想像は十分 と数人の概念官が終ると、取酬をも申してしまへ」 に別人はしまなかも別れていたのだが、など認識したかを別れていたのとがない。など認識したからもの原始ないのには目わからない。を取識べるにあたっつでも多似跳べたのだらう」との訳的ない。たいだらう」との自自要になったらう」との自自要になったらう」との自由要になったらう」との自由要になったらう」との自由要になったらう」との自由要になった。 日を割らない。捜査も「私は辰之助を殺。

日毎ーデンサ 日十三月四年八和韓

「わが家を涼しくする工夫 2歳を追ふに異念だ。避異地に起く人は格別、 を考べるのは、その家の戦隊しさもしのばれて好もしいことだ。こゝに女体戦出の足勢が、るのは、その家の戦隊しさもしのばれて好もしいことだ。こゝに女体戦上のない。 かいしたらカガ家を

#### ||プールを計畫して| エ 7

中村正常



のを買つてきてしまふのです。そていつて宇宙を続つて自分で赤いませんぞっそれで赤いのがい、つ でも売してコンミニストではあり の密がして、とてもいく考へだと はあんまり子供じみてゐるや今な 気がするので今年はよしました。 正常さんが非年から鑑にブール

日毎ーデンサ 日九月七年八和昭

> カら慰癒した日なんかあつちのカ ーテンは白でこつちのカーテンが 赤だなどいふ、時ならぬ銀平合戦 が激じられます。 しかたがないから、実践に急行し しかたがないから、実践に急行し に赤ちゃんのために買った、大き た郷月別のパスに冬を空って変数 を瞬力のたらと吹ってもった。 いかれなかったら、その中に労を 深って、お客様や、関係になって中 上で、大きな様の様になって中 がの気気になっていたときまった。

ところ
で呼ばれ、テ
ところ
で記述其を
関つてきて、物をつけて天井にか
でりました。風が吹くとぶらさげ
たべチマがゆれてチリン〉
と総

第 お掃除を

**陰** 鈴木 公子

軽井郷へ参りますので、別に新し方です。それに夏は毎年きまつて の暑いのが皆様ほど気にならない 私は然がりなせゐか、あまり更

たゞ夏

**\quad** 

ちんとあげ、お代称もごくあつさ いのです。ですから髪などもき 響いのです。ですから髪などもき お恋いたして居ります。

なものよりかへつて部状を主しま なものを接ぎ合して、合せ目をレース系で輝んだり、浴衣で作つたり しても配白いものが出来て、高値 しても配白いものが出来て、高値

## 花をたや すな

學校 女長 大 妻  $\exists$ タ

h

さた灰の間の総ものなど霊養色さた灰の間の総ものなど霊養色となどに持べ、奈分なものは強しまつて、なるべくゴタ(へした感じをなくします。その個質層の色などにも迂意してるます。

夏はな

ダ風に作るとか続に繊매を利用なす。 脳のあるお家は縁をヴェランす。 脳のあるお家は縁をヴェラン

花が好きですが外から寝れて縁つさないでほしいと思ひます。私はさないでほしいと思ひます。私は よって私来で、 ・したことをしておます。 「概要の形はきまりきつ より、あり合き。 を表ると本常に柔らかな 分になつて、疲れを慰やされる うに思ばれます。そこで!!!

より、あり合せのこつばりしたおいので、そのでは、例へばグラスの躯子似とか、辞酒のあき瓶とかいつこ

て際一つと とめない よう にしてそれから部屋がきちんと片付い

町白い布で、末鷹形とか上版の残り切とか何かさつば

を駆けた形とかいろ(十二夫して を駆けた形とかいろ(十二夫して を動きす。その中に有さなど、 がけて一般都し代用にします。が クス版は第にアメコールをひた し板の口の似い時に二ます 信ま き、火をのけてすたに水につけて 切るの思なからに対しています。 切るの思なからに対しています。

又朝鎮 の続など、職 又朝鎮 の続など、職 御の都には たいかさ つたしゃうなと 順 があつて 夏を敬 にしさは しいものになります。 だいひゃしたが、アメパッサ スタスの歌のものなとはりを駆散には、トキ也などのタレーンペード・で花形しかるを終りませず。

主婦の心づかひ

正義 太

田 稲 子.

**本営に涼しく感じられます** 

テンなどもシースの涼しげなものそれか賦子を夏戸にかへ、カー

# ◇◇ んさ子公本鈴◆◆

#### 私の家 出土子供と子供のはも合せのよう になります。子供があなくなついなります。子供があること してあますので、主人と二人きったなります。子供があなくなついなります。子供があなくなった。 す。

品を利用することにしてゐます。がありますが、私どもではなか

すべて 東はそこいら 東はイで高端に、すべせを たっ。夏はイで高端に、すべせを ではりとをセット・にして、まつ が勝をいたします。入口の切眠な とは夢して打水をしておきます。 す。ガラスなどきれいに膨かれていてゐたものなら蹴日に ふきまそしてガラスなど一週間に一度拭

太田福子さん

マントルピースの上などもゴタ ゴタと物楽曲はおずにカテック スのものに代へたりして、少い 品でさつはりとした歌じにいたします。たとへ一幅でも花をたせさます。たとへ一幅でも花をたせさます。というにしても質は冬の系術の参数系のは「してものに代くたり、となったしてものに代くたり、とすることなるによりが観客とした時に、たち、となることなるによりの頭で出来るだけの物態をした時に、なりまります。

# 生

車 中 の美人

日毎ーデンサ

カによってはより以上の目的たる か際定の設見様よりの対象ができません。 一日を贈いてが表を求さればなら ねといふハメに陥ってしまったた めた、十八日の護衛日を十六日の側 盛等美俊にて審議のため田等 個し総額は十一月五日最親於の上 田後行にて昭夏等とうまいブラン を立てでゐたのが、五日には仕事 のため田のれず十二日と新史して を担すことは田栄ないと案り込んを駆すことは田栄ないと案のようとの集中の単述して公司が大統領であったが、これを置いては公前であったが、これを担づている。 じめて馳き出した。衆客外にはなるものかやがてスチームも通じは

やそれにお召襲へをしようとして

さにへきぬきしたと見んで恋を明け扱ってそこから顔を外へ突き出してゐるその窓からの風が一直緩緩に歪然の場でに吹き込むのは、い

やがで変色に圧かされてやがて日 の記はなららといい軸のものついた まだ。かとなったはこの様だは い。それもりも次が成を赤く上気 させつが気曲をビンが出せる。 としたうちではいため感せて日 したちっちが成れている。 100



にはあらず、割ぶところの変大なんめりとこそ繋的はべったことともであった。いつつまにやらうつらと歌ったっしく、これは大蛟な地野ーー・世守安ではて本人を放って定めし大幅学だらうと語を残って定めし大幅学だらうと語 見たかと廖杲けてゐる自分を笑つり目がさめたものと見たて――ほり目がさめたものと見たて――ほ

でしまつた以上はいかに乗入の館 でもする見つめてあるられないし に耐かの認み合つであるのと情報。 にも送しいわけたから 一歩頭いて にがあらかに 配本 の月 旧してみた 美人が自分の部の部の油田を辞見 して大いくぎで され 化粧を はじめ た。 双端の紅の分はて、あちらこの をは全年の付けばれて、あちらこの らの窓から変しのくたましまで新聞 にあるしているできているできた。 路 一 永 田 池………雨

人のお百麽研究のうちに用けたわれてある。平地に来てから乗り込んだのは赤ん切を描いたお婆さんと君夫婦づれ。これは先づ子供が上間についたのである。その子供の とおいお母さんがお婆さんにそ か時々左 の 耳へ 手を持つて行く「左の耳がどうかしてゐはしない

のからかぶのには笑顔で答へてあるから心配する程のこと!!!

1 星がお寝さんに「お削さんこのごろは汽車に修はないか」 をはじめてみるころだらうなど と、この男、車中の美人 観覚に は続うながら、一部には家胚症が すの基あり。子供づれの人々の間 にはこの時間白い食部がはじまつ た。 男がお寝さんに

でいいやちつとも」 といふ意味らしい答へに難し、 をは

以前は人力に楽つても酔つたやら「ほうそれや出世したものだな、

といふと、お婆さんの娘らしい

年を取るとすつかり慣れて丈夫にあるものね、 恐いうちはそんなであるものね、 恐いうちはそんなで

吹かれながらひらくして込みると 吹かれながらひらくして込みるそ の靴の棚の下には花の小さな残弱 が裾機標の如く可憐に吹き駆れて あた。 やうだつたから吸はこの土産と航 おいた 芝田の出産らしい館の縦 書いた 芝田のよ産らしい館の縦 書いた 芝田の土産らしい館の縦 のた。夫婦仲も高い者感と老人と と言ふのである。 実際な気分が貼れてゐるのがよか に、彼等すべての態度がしつくり に、彼等すべての態度がしつくり 書とはこの見辺の開物かも知れないがさもなければこの美人わざわいがさもなければこの美人わざわうか。窓外は整備に部に続けたまま散り緩つた製の大きな寒が風に吹かれながらひらくくしてゐるそ 愉快であつた。列車はすでに新潟

家

花

こざいます【四月一日―

です。殊に、北陸の濃泉は雪どけ四季を通じてうれしいのは濃泉

温泉めぐり

番美濃谷扱の観音さまの御開帳が ありがたいところでは西國州三 法要と博覽會

ともに関係数数率人の源に報信する概念条件法数を流送します「四月十二日 ― 十五日」 神歌語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、前隣語では、一四月末日まで宮崎市1 人の際に観告す

万國州人不從傳統會 [三月十七 日——五月十日與京田] 帝民山與北京海岸之 日—五月十日第京市] 日—五月十日第京市 日—五月十日日第1日— 福州大傳統會 [四月廿三日—

るのはちらかと思います。際の下で、ハイバン・ローダキのけようかと思います。際の下で、ハイバン・ローダキのすがにをごらんになるのは不愉快でせる。さらに土地の人ともがつて版付着には、あれたこしく数つでからません。いったい酸化を見るほどもつん。いったい酸化を見るほどもつん。いったい酸化を見るほどもつん。

酸なしに概を見にゆくのはなんだ 酸なしに概を見にゆくのはなんだ ですから、概の知 ゼーとはそこをいつたものです。 あるもの です「朝日に (切ふ 向機) の魅かい時間だけに機の美しさは る頻線から朝日がのぼり切るまできそむるころ、東の空が白々とす かしいものはないのです、花の吹か さめた北陸の自然はトタン、冬のながいゆううつと位

- ~ 0

旅

の

下層は影像がモダンなために服 東脳再のお答が流れこみますが寛 を記述等のころゆく土地でせう、 お手様なところは併豆の激発地、

と出かけたくなるシーズンです。 鏡心をそくられ、ついうかくく

花の旅ごろも

近代旅人氣質 で難りました、近ごろの歌い歌行者は土地の持つ街ひい歌行者は土地の持つ街ひ

O 2

作」以來、下凸の禮衆比索人の獻 方、金色後文の總部の衛岸、不如 新の選子の源は永久惟を持ち、ち かごろでは長谷川・戦の「殷賦草 かごろでは長谷川・戦の「殷賦草 とか男生と来たら「三原山へ行か ない」とおつしやいます、総部に ない」とおっしゃいます、総部に ない」とおっしゃいます、総部に ない」とおっしゃいます、総部に ない」とおっしゃいます、総部に ない」とおっしゃいます、総部に ない」とおっしゃいます。 ですが活動量さんが新版をつくつ

旅行の注意

私 Ø サン デ

ち、それは服資ですし、際に駆然 ち、それは服資ですし、際に駆然 ち、それは服資ですし、際に駆然

宿の心得

いふところが出来ましたけれど、ハメを外して吹んだら、遊院学企 部の一割で大した家代をとられる ことになるし、顕版などでは一割り がばかになりません、二百人が三 た。間には流代は全支掘の一部と流代謝絶がずみぶん多くなりまし

-無事があやしい-

りません、たとし起野効用にかぎりません。たとし起野効用にかぎり五分程度の機能部別がございます、といって他の効果に深つたらかり動しれないよう……なば分は大害市ならば、衛目経際してくれますかならば、衛目経際してくれますか。

70

フです。 フな施設をなすことは概答誘致の 一手数と見られてゐるのは誤憾子。

携帯品は

せうか。

二日総ならどうでもよいが、五日六日の髄と來たらカバンくらゐは持つた方がよいでせう、第一館は持つた方がよいでせう、第一館 せます。脳の脱ばかき捨てなどとひ逃げだ曲断すな」てな顔色を見い、夜遊びに用かけるとコソラ食 大金は持步かない、お小遣は一日五

来ましたがどうやら私は影響をといてす」 しいです」 といてす」 といてす。 では、大丈夫。この網 第名「なアに、大丈夫。この網 第名「なアに、大丈夫。この網 名にか、つても常人は一郎影響も 不使も感じないのだから一寸恋人 「そ、それですて。私でにはわからんですよ」

PYGOT

入りであとは小 と思ひます

てあます。だから八月がいはど私
の一年中の日曜のたまりみたよう
なものですね。
◇ ……対称は 併切に 行きまし
た。毎日のやうに海にくつたり、
温凝につかつたり、ゴルフをした
りして張しとした。

映画がきても見にいくれます) のです。それでどうしても見たい、 のです。それでどうしても見たい、 をとい、歌画があると、日間は中 日本時から映画がかられるので、 「記書をとて破職がかられるので、 「記書をとて破職がかられるので、 「こことがでいる。」



◇……朝起さて二つばかりおけ

○ マーマーはおけるとがあります。 強くまで出掛けるとがあります。 と、しらべておいてはもつと なると、しらべておいてはもつと なると、しらべておいてはもつと

「是非」度訪ねてやつて下さい、 に様になってから、私の様とも 上に様になってから、私の様とも 上に様になってから、私の様とも

ななりをしたりするので、職員を は危険分子扱いをして、教践を の時に、R子さんのことを非難す る先年もあるが、都育から財命へ を作るので、本人のことを非難す

『S子さんがいろく~文県物を讃んだり、田舎では一寸職立つやら

りを怠いでゐた。いまから丁度穢 就の安津丸に聚つて、経館へと賦 かを怠いでゐた。いまから、朝給曾 は、秘書のカイヤオから、朝給曾

氏に現てられたものであるとか、 氏に現てられたものであるとか、 で、その手能が、あるひは凝池質 で、その手能が、あるひは凝池質 で、その手能が、あるひは凝池質

もありました。芥川は、膨低は って原用によけつでみましたが、 一般の機に再直がはつるみ るしといか出したのです。酸として 深入が不どに行ってみると、郷一 つとまつてみないのです。ととう が不能算なとには、脚子を一つ んだたわざきの膨低し続き得して もった芥川の着物の機には、まさ しく申ロルコ・度当のであるので、 とく地は、「かった」であった芥川の

その微性無信に月の 許鵬な 使 で、一蹴の等を吹いといた、1 世間大力で大月の辺に、十両度 サー玉度の月が、ありまれた姿裕 サー玉度の月が、ありまれた姿裕 けが調査すまし続かのするにщい であたままし続かのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい であたまましたがのするにщい のしの間間、ホノルルの日都に選ぶ のして、部本十月だほどと雰囲かで跳 のた、部本十月だほどと雰囲かで跳 のた、まま本子はでして、つぎ へ、次元で、キャセンでつぎ、つぎ く、大日を研じてもだっ、つぎ く、大日を研じてもだっ、つぎ

出山域部は保証的をよりを直も に翻選に帯かべて「異る個友への 手記」こと、 御他氏でも なけれ ば、久米氏でもない。 処すや山垣 ほその人に知てて書かれたものに 見密ないといよ職債を無いた。 なせきらした職債を無いたかと

といつてもそのころの依頼はまだ年頃にはなってるなかつたであらら。その依頼が、のちに芥川氏らう。その依頼が、のちに芥川氏

山地氏の蛭になるその合類

深入も吃得したといふことでし なっそればジネ州の可能は、デリ ケートに入ってゐたのです。日本 のようなせせこましいところを配 れて、この版々とした存気なとし、 ろへやつて來たら、あるひは芥川 の曲配紙物もとくなるかもわかり

うが、ある女の歌歌などもかなりの声歌感謝もよくなるかもわかりの声歌感謝になるについてはいろくの 原因 もあつたでせ

ク年の今日にいたるまで、韓国派 のお徳明をついぞ、副も能やした ことがなく、此昌遠、を加崇、他 十志の三人の管理を予節に感飮し である来げ、文子さん なのであ る。

なぜさらした態候を無いたかと いふのに、私がサンパウロに能伝 いかのに、私がサンパウロに能伝 にの好意によって、言語山域丘篷 の野意によって、言語山域丘篷 が、居住してみた、サンパイオ・



日三廿月七年八和昭

多分七月二十六、七日頃の日附の新聞だつたと思ふ。の新聞だつたと思ふ。

しく話しを 聞いて ゐたからで 山城氏と芥川氏の腿徹について委んな謎話にふけつたが、その時、んな謎話にふけつたが、その時、よくサロンのソファによつて、そ

にはいつた時、私は吃煮していふ四野か五段抜きの大標데

苍 111 龍之 介 遺

なして思か出しましたが、かつ はなして思か出、女の醍醐をいふお たのですかね、女の醍醐をいふお

(奈却の土田鬼様は非領)

= =

个 4

16

á

33

ちんだ 集

方有

4

国界の

澄

江

堂七周忌

紫がが開えかの手紙

表養

に、ブラジルのサンパウロで腫れない、ブラジルのサンパウロで腫れてあるのをみて、私は、数ケ月的

ので、兄さんの任地へ、お母さんと一緒に来てゐたのです」 「あなたが30子を知つてゐるとは 全く不思議なめぐり合せですね」 「私はまだ芥川さんには「吃も懇談

,

く歌について現や肉といはれるのたからと、何時も、歌殿音響では 充跡をしてゐるのだよ」 と私に謡したことなどを歌び出 した。

芥川氏の 中 學 時 代からの親友

話しをしましたら、大観奏まし『芥川は、僕が南米へ行くんだ

**切けて行くから君は先に行つなしをしましたら、大魃羨ましたら、大魃羨まし** 

く現在ではサンパウロ市からあま り添くないところに二つの大震場 り添く か少しも見出せなかつた。

私は安津丸の顧認で、たとへやうもないやうな重治しい氣分になって「販震友へ送る手部」を耐んだ。 変を態態し緊張にも美能観点を でが、優は使自身の終死してある でが、優は使自身の終死してある が少しも見出せなかつた。
ころい版は年数を定めたのも
中ばは住に総督したるた。他つて
年には大変なんなののより
中ばは住に総督したるた。他つて
年に対いるためのスプリング・ボオドを
の数に何といっても女人であ
っつのは何といつでも女人であ

が芥川氏とそんなにまで深入り、 水でゐ た あ のS子 が、あのS子 が 、あのS子

思議に腕の中を芸來した。さらし

だったのを壁にてゐる) 大つたのを壁にてゐる) 大つたのを壁にてゐる) ・ライストは彼の自動さる脈に なることを翻翻して。またライスト なることを翻翻して。またライスを まる・リニルやデッキを一し とにセエッ同に授献してうとして なる。しか優はで新にから、 にを使の出ってるなないを にを使の出ってるなないを にを使の出ってるなないと にを使の出ってるなないと にを使の出ってるなないと にを使の出ってるないと にを使の出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にを使い出ってるないと にをしてして。が、それに母る フレビュウは。そのうもに提ばな フレビュウは。そのうもに提ばな

芬川中學卒業時代の手紙の一節

の悲をいたはりたいと思つたから の悲をいたはりたいと思つたから である。同時にまた候一人自然すであることは二人 一しよに自殺するこ 使はたとひ死卵するにもしろ、(際) をれは濡も一しよに死ぬものの ないことに (総) 空したためではな ないこと に 総) 空したためではな ないこと に 総) 空したためではな

S子であつたと思はれる節が裏暇とした」その死なうとした女人も つてゐる女人は僕と一緒に死ならこの中に出てくる「たゞ僕の知

られなかった。 8 子は斜裂の差をした一十明を整きのけるイットを行ったたなもったが、字はなりんざりするくらあ下事だったからである。 たと下手でも学にならしさがあるばまざな対すないではないが、学だけは不振器に交挙者 あるのであらうと懸はないではあ 人とは正しく8子のことを指して 人とは正しく8子のことを指して 

長谷川 甲賀三 郎 伸 土師 松 崎天 清 民 = 竹 本 田 Ш 敏 荻 彦 舟

者筆執

......

をつたらうか~ことに復近らの調の研究研をかくげて、新く春を惜しむよすがとする。 あつたらうか~ことに復近らの調の研究研究が、甲貴三郎、松崎天民、仕出統定、天野連の

#### 大 津 附 賀

・フュー は高温二などは年度のことだから窓かないが、から籐を観え人があつては、一人が、から籐 この次は是非女房に見返らせとして ゐるの は幅 が利かな

九時四十五分数車。 ・大人しと響たらしい。料用のい ・大人しと響たらしい。料用のい いはすの魔江が郷上でガッコソ 踏をさしてるたのは、後で削くと である。

語らしく、小舎の恵子を打つたものり見込む。この物語「行気」とかった。
物質人類や大なには対象しかった。
物質人類や大な機能費く。
大阪の総線用がお、豆殻増用の機能が同様を認める。
イ、融内の機能が同様を添める。
人なたこんな時間も関係がなった。
とのない域中で、殺しさらに流

、んこんな時間に ことのない逆中で、か を避んである。 

した仮名。ここで 版本から日吉詢社へ。ちよ

**花時ではあり、附近町村を合** 、跡ふ人の世

解の光が物様く感ぜられたのを聴いの見いの、もの特徴のある着犬の とに濡れた格には、杉の下線にしと を取した時には、杉の下線にしと 阪本 から ケーブル で山 頂に向

宏大な本堂の暗い内障に、開祖に行く。 満二、蘆江、荻舟など、根本中

ケーファット ので、サーファット も、行の歌を選がり前で石山ドド・ も、行の歌を選ばりが、いづれ も、行の歌を選ばする。 万山から自動車で一部歌歌に歌

ご嵐

# 松

・ こうの「京の四季」を見たころ・ こうの「京の四季」を見たころ・ 、 地唄の「郁取り」を鬱鬱めい、 井上の久龍がスラリと立い、 井上の久龍がスラリと立 は表しかった。 は世界の魅ったことが、私 は世界の魅ったことが、私

れを下賦する千島 送られて嵐山へ  $\Diamond$ 千島の一宝へ翻着い

たらなっても、

と浴るやうな家ではなかつた。 を合らしい 護道な機へで、一郎ばかりが十五大人も、ドヤーのは、十一時を過ぎたころだ たのは、十一時を過ぎ

、さら思はせる だけ の 魅力たら、この干鳥に來よう」

いものの一つだ。その状態を壊す 高の胼胝さは、栽だに忘れられな 以來絶なないといふ部脈敷の娼の 続しの船で石山に向ふ。ルを踏りて阪本から、太

# 袁

部部してゐた。ちもとの斜理 月 (記述――あわたとしい中にも、私 にもはそこで、片面千郡郷、大河 ためはそこで、片面千郡郷、大河 内郷次郎、伏泉朝江、中村大三郎、 小町川鉄盛の人々と、なごやかに 言葉を交した。 たちも、それく「原むらい巻を を駆めることが出来た。三勝、万 を取めることが出来た。三勝、万 人たちも、それく「原むらい巻を

には、安米館やら佐渡おけさやが入込んで、舟で上下の賑はしさが入込んで、舟で上下の賑はしさ が入込んで、舟で上下の殿はしさが入込んで、舟で上下の殿はしさ

の**武**聚へ出かけた。 なさ、5に流れてゐた。 なさ、5に流れてゐた。 w巡って、宇治 何の苦粉も

# 醐ご黄檗

醍

山蘆

江

ッたと思ひ得ることを幸秘だと思ったと思ひ得ることを中情いと思はず、 のたことを口情いと思はず、 のたことを口情いと思はず、 のたことを中情いと思はず、 のたことを事務だと思 **能物と音楽とには、完全に彫断 監修と音楽とには、完全に彫断** 1. たら感染が増したらしいと明く。 主、そんな、暖、水を分にあるやう。 に、そんな、暖、水を分にあるやう。 「石立つ、「競月石」といふ。 大根服製を影響の間。。

3名が所詮非情の一石である。 苦然してして でんしょう 苦然して

らである。成畿は悪はぬところにちである。成畿は悪はぬところに、電常ななつかしみを感じたのは、電 調理の推造物、質物、 悉

な宗教である。 人間の一部に ある。

るひは湿州好みかとも思ッたが、る既臨城であらう。果石布遣、ある既臨城であらう。果石布遣、ある ころに、真の味がある。いはゆ 野太陽豪華の余沫、余淋である

おけ ) 一行(本社



## 奈良から吉野 蘆

郷つてはゐても、睽含はこる花の 野つてはゐても、睽含はこる花の

#### 追憶小 説泉 0 揭 白豆 邦 枝 完

日毎ーデンサ

日九十月二年八和昭

その後から立つて行つた。 後は彼女を見守った。 後は彼女を見守ったる 後は蛇下へ用て、懺輩をふた

同じ年の二月の午後。 野入合ふやうに割を着いてるた。 質入合ふやうに割を着いてるた。 質入合ふやうに割を着いてるた。

3

た。この時の出し如たく養育であない。

今川橋の松屋の角を、大股に歩い靴を訪ねるために、韓田縣から、

だつた。

彼は母と一緒に帝期に出っている。

を、淺の中に散らしてゐた。 を、淺の中に散らしてゐた。

上へ、伊太神寺式の漂然色のマン上へ、伊太神寺式の漂然色のマン上へ、伊太神寺式の漂然色のマント、 と、そこの、角を曲らうとして、

38 8 8 9 9 9 9 S

・ を、漆の中に敷らしてらこ。 ・ を、漆の中に敷らしてらこ。 、彼はまつ

「選だ無難ですが、像、からいようとの。」
著ですから、どうかよろしく。」
「有難ごとなった。とうかよろしく。」
「有難ごとなった。 おのの職職だった。 か、彼の職職だった。 か、彼の職職だった。 か、彼の職職だった。 か、彼の職

仮女も顧問なく仮を見守った。 仮女も顧問なく仮を見守った。 ちない不利の位置にありながら、 らない不利の位置にありながら、 と 舞歌館でしたらう。」 こくらでしたかっつまらない物で、

へ出たドアの横に立つてゐ

「おなたには、いつか、影響依備できましたね。それから、松田の様でも。――」「「おく」」「「はく 側ばくなっますね。」「「では」く 側ばくなっますね。」「では、く がばい よく ガロボウマナか。」

4 わ。是非一度お遊びに。―― 名刺の覧話は、青山一××六だ

同じ年の五月十七日の午後。 彼と彼女と、彼女の母の三人は、 北州伊春傑の、見晴しの歌歌に立 つて、遠く赤城の地峰を眺めてゐ た。

「よろしい。潘 れたら溢れた時であた。 であた。 であた。

その影響が概るか終らないうも に、びかりと光力と総数は、続も 服を川の豊方に歌響を離かせたと 駅か割もなく、ほつりと一端、大 駅の中うな雨を、足帯に潔した。 「いけなない」

生管局際には一ケ所もなかつた。
が、財経的をするやうな場所は、 うに、すぶ濡れに濡れて、危ういかつた。三人は川へ溶わた光のやかつた。三人は川へ溶わた光のやかった。三人は川へ溶わた光のやかった。

トできらかなあっても、妙だよったできないったのかね。買いやしないかといったのかね。買いやしないかといったのかね。買いやしないかといったのかね。 A言君、自動車はどうしたい

蹴なんかへ遠入つたんだい?」 「あたしとお母さんとで、 うかなあっでも、妙だよっして」

泣き

、 一年の一夏を、骨濃の脚所離聚で 共に鄴した、排い、しかも悲しい 思ひ出があつた。

、ホテルを続け出して、ひそかに、 経田彦の山に弱つた二人だつたの だから。…… が、彼はかの総人として、いまだ が、彼はかの総人として、いまだ

田村孝之介畵

いやうな氣がするよ。」

足を置みしめ置みしめ、木立の中 を縁つて歩いた。 緯鳴嫌ひの彼女 の様は、たゞ無意識に、足を運ん であるだけだつた。 で、原則野球戦のラデオを動いて ない。原則野球戦のラデオを動いて ない。 原則野球戦のラデオを動いて ない 原則野球戦のラデオを動いて ない 原則野球戦のラデオを動いて は、展断されたのは「下原軍保証されて」た。 原式の はいい にいっした いくつになつた、 と 「干着さん、いくつになつた、と 「下着さん、いくつになつた、と

大場一郎、先づ砂かされて靴を 続はれた前壁山である。 即ぎ軸壁 の日本化された、や、高質な蛇の もる鰹節に繋し、これを支距継摩 と日本態味と、何等の即りもなく、

、蠍解に寒合一致したど、何等の駆引もなく、

れて、新規時間 な。新規時間 編から、嬰児になっ 編から、嬰児になっ た古へ人に同情だれるで、 で、たって、かったに が、て、わったに がって、わったに がって、わったに がって、わったに がって、わったに がって、わったに がった。 がった。 から後人

える、夢 大自然は、たゞ獣々と ぶらしかない彼小

町の家々、道崎の設備など、多少 年前、やつばり花見時だつたが、 年前、やつばり花見時だつたが、

A 一路製山へ自動車を駅らせる

0

#### 谷崎 潤 郞 -----

# 『結婚休 日案』通過中

# 阪神沿線夫婦戰線異狀ナキラ

その心臓を膨胀した谷首側一郎氏 が風の吹きよで、トタンに慢慢變が風の吹きよで、トタンに慢慢變が でしました。――十なはも鬱寒が が要になつたんである。彼氏の状 が変になったんである。彼氏の状

(三)廿五歳以下でなるべく初婚で

であること。 (大)財産地位をのぞまない人。 (七)おとなしく家庭の婦人であること。 (五)美人でなくても手足のキレイ (四)なるべく恋人であること。

かしら?(関西地方の文學や女)かしら?(関西地方の文學や文学など、会持の際語)

日毎ーデンサ

日三世月七年八和昭

――一種に、腸直と決めたのがシャクだ、上方の女のどこがいゝ といふんだC江戸つ子ン

からした人謡が立て網班側近のたまなかへたをとした(?) 湯穏のたまなかへたをとした(?) 湯穏のたまなかへたをとした(?) 湯花のたまなかくたりにして低さくて、木夫人です。 (役なの関連書を組みを実施会等、実施の者 常年 かんげますれば、局体市西町工政・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪ののイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪のイン・大阪

四海波をすませ、高野へ上つた世間に織つてゐられるかい、世間に織つてゐられるかい、

、高野へ上つた。

「谷崎氏は丁老子夫人を離別した

国本の部にはながチャンとついて るく、丁本子夫人は脚ぎらるで数 しけ、さめくしんがきながら、比 かと、別さる娘もで見なくるも、 野に男性として不動な行為でも もった」とした。野歌してのなくなった。 たった。とした。野歌してのなった。 たった。とした。野歌してのなった。 であった」とした。野歌してのなった。 のぼり、女歌歌してめた。 のぼり、女歌歌してめた。 なるのであります。そこで男性 の名譽の ため に事の起りをたづ の名譽の ため に事の起りをたづ の名譽の ため に事の起りをたづ の名譽の ため に事の起りをたづ

男のお客さん一人だけ…… 男のお客さん一人だけ…… 「解海ルと、ホントの縁起術だと、 連起術だとのシトの縁起術だと、 「変え」と、このよの縁起がない ら、ミジンも疑びをさしはさむ余 と、大緒がおつ しゃる んだか

丁未子夫人のカク

認

4

配着T加子がよくできてゐますナア、ご自分でおつくりになるのですか」

簡質も 栗では ないデスゾョー ×

ないもので人に導きと家館の心配をするデス、歌、歌ふな!) 夫人二十九円ですよ」 配置・お金に不自由のない泉サンですから、お暇をどこかへお翻て

大人さうですのよ、二日に一度 のおけいこやけれど、繋がとろし うないよつて、一つに長うかくり すんのや、いま鑑つてしを認って あるのやけれどなかく、膝に入り

谷 崻 潤 郞 氏





Ξ の 頃 の 丁 未 子 夫 人

XX 23

の根據を突きとめるんだつた

夫人はまだ糶が入つてゐない、さラ不則罐やな? ことによつたら 記者「生花がお好きださうです話はねにか? ソウデャー つたけが……、もう何もいふまいりだ入口に「古川篤」と書いてな

れ」 大小部は油ヶ坪・一部に一度 おけいこします。自分の部見を主 要するので先生部のはります」 (生花のつぎにはすらむやお琴! とうです、ナン・野部時日本にふ さはしまマンタ・サニーではない

記者は終は矢鞭り生田灘で

大人で荷には金はないんです。大人で荷には金はないんです。 おたし窓際のことを原分やによったいまた質を時んけれど、離ったらまた質を時んけれど、離ったらまた質を時からない。

ッチリと繋を入れてしまつたらなッチリと繋を入れてしまつたらな 線、のどかな大阪ことばでボッボかつて息取な景校および大阪女別で励の明晰をほこりし丁ポ子

がくくおん出るわけにもゆかない し、出すといってもむづかしい、 総難は男女の窓場なり矣……」

(待つた、ボタの診臓の重大用性しゃいます。 繰り返しつ > 青柳に …… の音羽山、乱る > 瀧の白糸を 、 のでい変りの音無しゃ 、花の鏡 戻りつ、暑いのに苦労していらつといふようなところを、往きつ、 来聞のコンデション騒めて思いら

ほうがなにかにつけて便利でせう

から離れて、お耳に何日目にか過から離れて、お耳に何日目にか過して五月がありますさかい、からして五月の

であります。つまり谷精氏と同様 三年、夫婦年語はそう(ファビ を贈めるようになる、そこでフリ クシュ友達分を出すため一般…… といることになりはしませんか! (おつさん、脳のエ・トコあるナ ア・ なんていやしいヤジを滑伐 すっな講響でし) 



かすでじ存ご な質重に敵素 記日兒育

日毎ーデンサ

日大十月四年八和昭

# 可憐な小兒の生命を カ が

かす

シ

流行

## 恢復 期の手當が命定め

# お母樣方ご用心のこご

の後に削削期、設 日間であります。 日間であります。

の競技の有様は船針大

と思ういてのます、歩わせんも今 は「養養が大き間です」しかし替 から物質にかけて適じいインカル 都のボテルに添けてませい、シカル 作のボテルに添けします。 今年も久既にがけます。 今年も久既にがけます。 今年も久既にがけます。 今年も天既にがけます。 今年も久既にがけます。 今年も天既にがけます。 今年も天既にがけます。 今年も天既にがけます。 今年も天既にがけます。 今年も天既にがからでからしている。 日本・七郎ります。 のが多いと言はれて困ります。

この時機には暖も激しく、盛が寝 この時機には暖も激しく、盛が寝 になります。 然は三十九度から四十度を往来し

会別は全くなくなり、非常に初を 第一、ます、同時に、著。しく接頭接 等してグツタリとして來ます。

度を起して危険な場合が少くあり はれてゐるやうに、この恢復耶を しくじると、厳心から脈張や百日 しくじると、厳心から脈張や百日

しかも前縁制には最終と極が出る だけで、風報と同意識いので、側 成の機管が多いわけですから対別。 のあるご客館では設置して、ハシ からしいと名用いたら風影響・小からしいと名用いたら風影響・小からしないそうにしたいもの 2"

に回復して行きますが、一旦際が終る次節に消む、食感が出て職調をあ次節に消む、食感が出て職調 後期が終ると、帰還が

既に虚操から非常な詐判を勘いて こう こうしょう こう こうしょう こうしょう かんしょう こうしょう はいおうさんを丈夫にする効果は

す。 分あるに拠らす、\*\*

らず、あまり設定し

概質で夜流きするのが特色です。 弱く、呼吸器と胃臓が漏く、又気 いったり、 が足りないのだらうと早からな場合、時としてお母! **招くことがありますからごすが、その為に重症の緊急** 乳を無暗と飲ませることが

と考へられます。 上しい機能、または一回の機能時 面を能減することが効果がありま す、解集後の小児なりば常化のい が感素の多い食物を源度に幾へる

るべきだ

たら宇津政命丸をお服ませになることです、又青飯が概くやらでし

● 17 長見の療法としては、際質をよくするやりに謂るととが第一です、総に習順と呼吸器を太天にする学津数総丸をのませることは大後い、ことです。

門乗です。設所不良とは此れら十 この乗は胃豚を丈夫に消化不良に この乗は胃豚を丈夫に消化不良に

(告度而全)

29

28

入選玉堂と、選外信作十三堂を 谷

# 入選五

淸 賞金各三百圓 宛

鶴

澤 談書 石 河 內 城

綺.

殺 鬼 頭 恭

空間

0

人

溝 平

ころの政

Ж

達

男

彩 鬪

金 勳

衛

# 選外佳作十三篇

久盛衰記

巷說眞上騷動 村市次郎 瀧口 郞

本 藏 澤 春 江

道こ

0

武

猫

古 田覧

靑 木

光・闇を貫いて 岬

< 3 路 芸

3 盤

池

中 彦 = 郞

中

Ξ

封

h ج 鴨 旗

平左衛門の切腹

木 村 軌 子

縞

告ぐ

名人の藝道談

城氏

ユーモア小説「穂情経談」 は、名古昼等楽館 が表二君は、名古昼等楽館 が表二君は、名古昼等楽館



石河內 文學希望の

純情青年 鬼頭恭二氏



トンヒた得に 者作の LA級の間空 氏平三口溝

#### 丁葉龜雄



幼き日父から聞いた

金田 勳衛氏 指のた話 上海 で

